木と職人。

自然のなかで膨大な時を重ねてきた木は、
切る人、製材する人、整える人…
最後の「つくる人」に至るバトンリレーをつないで
ふたたび、生まれ変わっていく。
私は、どんな家具を選ぼう。

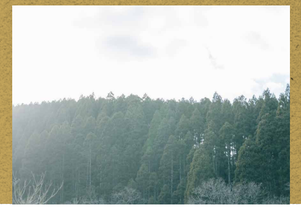
たった1本の丸太を挽いてくれる人がいる しあわせを噛み締めて。

小国町の中心部から少し離れた林道を、ドキドキしながら車を走らせる。視界がパッと開けると、せせらぎの音が心地いい、緑に囲まれた里山に降り立つ。陽だまりのなかで、「かける木工舎」のふたりがちょうどお茶を淹れているところだった。鹿児島生まれの東村英司さんと熊本市出身の當房（とうぼう）こず枝さんは、長野県にある全国有数の家具専門校で出会った。卒業後は、宮崎と長野の家具工房でそれぞれ経験を積んだ後、小国町で「かける木工舎」を立ち上げる。工房と住居、倉庫が点在する敷地内で、思い立ったら木を削り、疲れたらお茶の時間。自然のリズムで暮らすここでの日常は、自由で、穏やかなぬくもりに包まれている。

なめらかな肌触りのちゃぶ台は小国杉で作った作品。「一般的に家具は広葉樹で作ることがほとんど。でも町の人たちが愛してやまない小国杉を使ってみたら、すべすべで柔らかい木肌が本当に心地よくて」と、そっと木肌を撫でる當房さん。通常は、材木屋さんから製材された板を買って家具を作るが、小国杉の家具はオーダーを受けて丸太から選ぶこともあるという。「小国杉はどの山で育ち、切り出し、製材されたのか、関わっている人たちの顔が浮かぶので愛着を感じます。木を切ってくれる人、丸太を売ってくれる人、製材してくれる人、どの工程においても地域の人たちとのつながりがないと、自分たちだけでは完結できない家具なんです」。

小さな工房のために、たった一本の丸太を挽いてくれる人がいるしあわせを噛み締めながら、ふたりは家具を仕立てる。杉は家具に向いていないというセオリーに縛られず、自分たちの実感で木と向き合い、家具に取り入れる。その原動力は「本当に小国杉を好きな人たちがいるから」だそうだ。だからこそ、素材に誠実に、手間を惜しまず、暮らしに溶け込む家具をつくり続ける。

知り合いがまったくいないなかスタートした、小国町の暮らし。町の人々とつながりを得ながら家具をつくる喜びはひとしおだ。「かける木工舎」の屋号は、自分たちの技術と何かを掛け合わせる、という意味で名付けた。



PROFILE

かける木工舎　東村 英司　當房 こず枝

鹿児島出身の東村英司さんと、熊本市出身の當房こず枝さんのユニット。
長野県の家具専門学校で学び、宮崎県と長野県の家具工房で修行を積んだ後、
小国町に拠点を構える。丁寧なものづくりに定評あり。

阿蘇郡小国町西里1608-2　https://kakerumokkosha.com/

名前のない木が、日常のふとした時間を満たしていく。

静かな森で、長い長い月日を重ねた木の木目には、ひとつとして同じものがない。夫婦が手をかけ、その心地よさや形の愛らしさを追求した木の作品も、それぞれに「表情」が違う。「僕たちの元を旅立ったあと、お客さん自身で素敵な名前をつけて大切に育てていただけたら」。屋号「ネームレス」の由来を尋ねて返ってきた答えこそ、「木と触れ合う暮らし」を大事にしてきたふたりの根っこの思いだ。

始まりは、小さな子どもに喜んでもらえる「木のおもちゃ」をつくりたいという気持ちから。しゃかしゃかと音が鳴る「ひよこのがらがら」。ギギギと面白い音を響かせる「さかなのギロ（楽器）」。手で振ると何ともいえない癒しを感じられる「はっぱがらがら」など、木ならではのぬくもりとユニークさ、自然な息づかいを感じられる小さなおもちゃが、ふたりの出発点となった。設立から8年目。一人ひとりのお客さんと真摯に向き合いつくり上げる、店舗の家具や什器の設計・製作や木工表札、手描きのフラッグ制作など、活動内容の幅を広げたいまも、ただ1本の「木」に向き合う。それは、小さくても大きくても、等しいひとつの命だ。

「きれいに作ることができる人はたくさんいらっしゃるので、僕たちは、求めてくださる方との対話を大切にしたものづくりがしたい」と徳秀さん。穏やかな人柄とサービス精神が、多くの人を惹きつける。

PROFILE

Name less　阿部 徳秀・有喜

徳秀さんは建設会社の設計施工の仕事を経て、佐賀県にある木のおもちゃメーカー「飛鳥工房」で修行しながら家具制作をスタート。有喜さんはひと足先に同工房の職人として制作に励んでいた。2014年、自然豊かな肥後民家村内に「Name less」設立。

玉名郡和水町江田302　https://name-less.jp/

ただその人のためだけに。「育っていく家具」をつくりたい。

ぱっと見は確かな存在感があるものの、極端な主張はない。なるべくシンプルに、使う人の色に染まるようにつくられた家具。「Woodworkstree」のオーダー家具に触れると、職人と似たものを感じた。木と人。作品の顔は、つくる人に似るらしい。

きっかけは、学生時代に雑貨屋で目にした一枚のポスター。「名作椅子がずらりと並んでいたポスターにひと目ぼれしたんです。色んな素材でつくられた椅子を見て、こんな椅子を自分でもつくってみたいと思いました」。東京の建築専門学校を経て、工房で店舗什器などの職人として働いたのちに帰熊。さまざま試したからこそ、『自分の手で本当につくりたいものをつくりたい』と独立した。それはつまり、「職人を志した“原点”といえる椅子づくりと真剣に向き合う」という決意でもある。「それでもまだこれというものがつくれていません。長い時間をかけて代表作を磨きあげたい」。好みと暮らしに合う家具を、その人のためだけにつくる。椅子、ダイニングテーブル、本棚…ただひとつのオーダー家具を迎え入れる喜びを、待つ時間もまた愛おしいものだと、職人は教えてくれる。

妻の美紀さんも俊昭さんをサポート。「Woodworkstree」ではオーダー家具のミニチュアをお客さんに渡すなど、「できるまでどんなものになるかわからない」オーダーメードの不安を払拭する気遣いが光る。

PROFILE

Woodworkstree　木村 俊昭

東京や地元・熊本での職人修行を経て、2021年に「Woodworkstree」を設立。木の質感を生かした家具、小物、木のオーダー家具を提案。丁寧なヒアリングや制作イメージの細やかな共有を通して、「お客さんとともにつくる」過程を大事にしている。

IG　@woodworkstree